

北海道蘭越町立川1遺跡第6次・7次調査概報

長崎潤一・高倉 純・鯉沼来人・北村成世

はじめに

北海道蘭越町立川1遺跡は、1958・59年に市立函館博物館によって調査がなされた。有茎尖頭器石器群や細石刃石器群が検出され、それら調査成果は、北海道における旧石器時代研究の基盤となる編年の構築へと至った。一方、有茎尖頭器石器群と細石刃石器群の共時関係やその変遷に関しては、なおも議論が続いている。

長崎と高倉は、有茎尖頭器石器群と細石刃石器群が検出されている立川1遺跡を現代的視点のもとで調査を行うことに意義を見出し、2022年度から計7度の発掘調査を行ってきた。第1～5次調査の成果は既に本研究紀要において報告を行っている（長崎他 2023、2024、2025）。本稿は第6次調査（2024年10月26日～11月3日）、第7次調査（2025年4月26日～5月6日）の成果の報告を行う。

第1～5次調査では、A1拡張区において蘭越型細石刃核を伴う石器群が出土する石器集中部や市立函館博物館による1958・59年の発掘によるものと思われる掘り込みが確認された。A20拡張区では、有茎尖頭器石器の製作址を検出した。第6・7次調査においても、同様の調査区における掘削作業を行い、石器集中部および掘り込み土の範囲の把握を試みた。

掘削の結果、A1拡張区では、掘り込み土がさらに南東方向へ拡大することが確認された。A20拡張区では南側に調査区を拡張し、石器集中部の範囲の拡大を確認した。

なお本稿は、文部科学研究費補助金基盤研究（B）（「更新世末の北海道における尖頭器製作・使用行動に関する総合的研究」（課題番号23H00688）研究代表者 高倉 純）及び文部科学研究費補助金基盤研究（B）（「旧石器・縄文移行期の研究—細石刃石器群から尖頭器石器群へ—」（課題番号25K00528）研究代表者 長崎潤一）の研究成果の一部である。

1. 調査の方法と経過

(1) 発掘の方法

第6・7次調査は、第5次調査に引き続いてA1拡張区とA20拡張区の掘削作業と、新たにA10拡張区を設定し、掘削を行った。掘削は人力で行い、掘り上げ土を4mmメッシュの乾ふる

いにかけて微細な遺物を回収した。

出土した遺物は Topcon 社製の Layout Navigator を用いて出土位置の記録をした。5 mm 以上の炭化物に関しても、遺物と同様に出土位置の記録を行っている。

(2) 発掘調査区

各調査においては、以下の範囲で掘削作業を行った（図1）。

第6次調査では、第5次までの調査で掘削が完了していない A1 拡張区の掘削を継続して行った。A20拡張区では、第5次調査までに拡張した調査区の南側に、1 m の拡張を行った。既存の調査区と、新拡張区の間には20cm のベルトを残した。また、A21グリッドにおいては、3 a 層の下部付近から遺物が検出されなくなったことから、エンピを用いた深掘りを行い、層位を確認

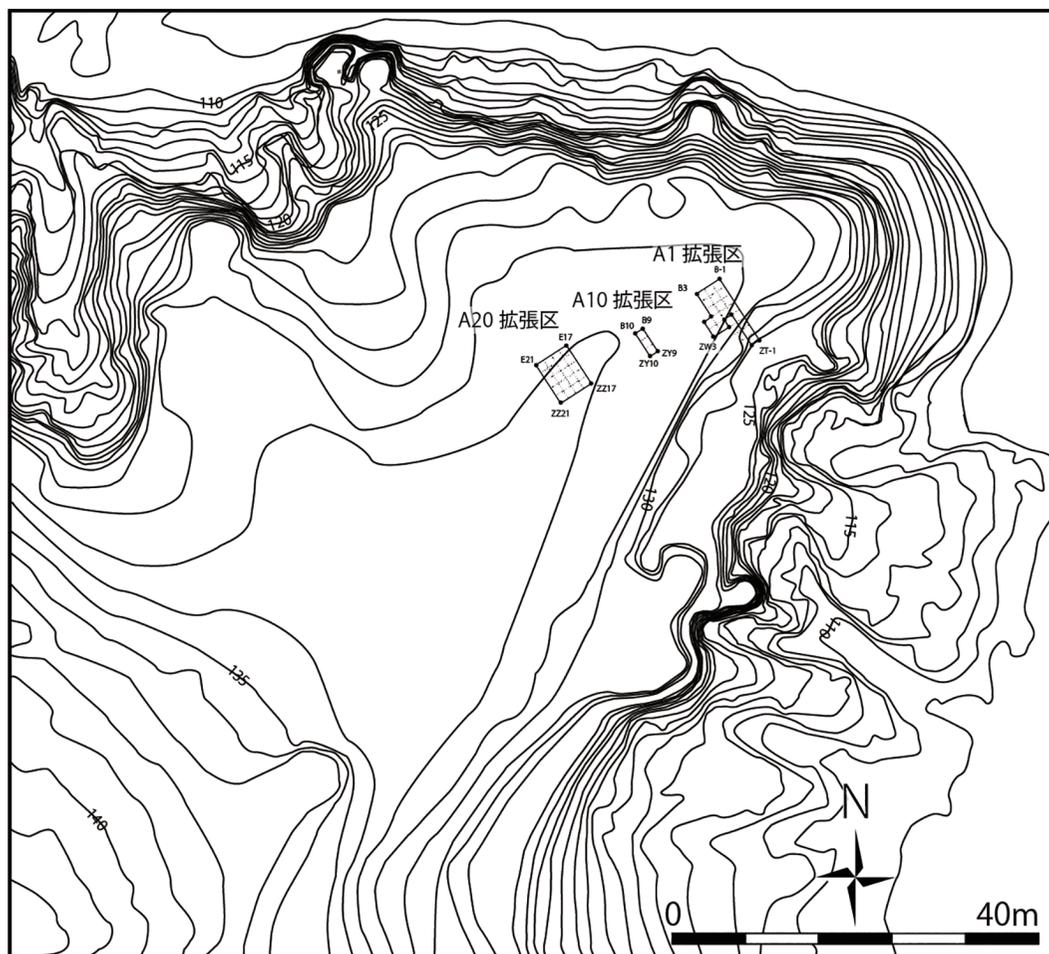


図1. 発掘調査区

した。

第7次調査では、A1拡張区を西側へ拡張し、遺物集中の分布確認及び掘り込み土の範囲の確認を行った。A20拡張区では、引き続き掘削作業を行った。また、市立函館博物館発掘の第Ⅱ地点の検出を目的として、第1次調査で掘削を行ったA10グリッドを南東方向へ1×2m拡張し掘削作業を行った。

(3) 調査の経過

第6次調査

- 10月26日 北大隊現場入り。A20拡張区掘り起こしと拡張を行う。A20拡張新設区は、グリッド北側に20cmのベルトを残す。
- 10月27日 早稲田隊調査合流。A1拡張区、A20拡張区の掘り起こし。A1拡張区とA20拡張区の掘削開始。A1拡張区、A20拡張区からチップやフレーク等が出土。
- 10月28日 A1拡張区、A20拡張区の掘削作業。A1拡張区では攪乱土から細石刃が出土したほか、A1拡張区、A20拡張区からチップやフレーク等が出土。
- 10月29日 A1拡張区、A20拡張区の掘削作業。A1拡張区で3層から細石刃が出土、A20拡張区では3層から石刃、有茎尖頭器の基部、彫器削片が出土したほか、A1拡張区、A20拡張区からチップやフレーク等が出土。
- 10月30日 A1拡張区、A20拡張区の掘削作業。A20拡張区で3層から細石刃2点と石刃1点が出土したほか、A1拡張区、A20拡張区からチップやフレーク等が出土。
- 10月31日 A1拡張区、A20拡張区の掘削作業。A1拡張区で3層から石刃が1点出土、A20拡張区からは3層から稜付石刃が1点出土したほか、A1拡張区、A20拡張区からチップやフレーク等が出土。
- 11月1日 A1拡張区、A20拡張区の掘削作業。A1拡張区、A20拡張区からはチップやフレーク等が出土。A21深堀掘削完了、分層とセクション図の作成。
- 11月2日 A1拡張区、A20拡張区の掘削作業。A21深堀のセクション図の作成と土層注記。A20拡張区では3層から細石刃3点、石刃1点が出土したほか、A1拡張区、A20拡張区からチップやフレーク等が出土。
- 11月3日 午前中にA1拡張区、A20拡張区の掘削作業。A20拡張区では3層から石刃1点が出土したほか、A1拡張区、A20拡張区からチップやフレーク等が出土。セクション図作成完了。調査終了写真を撮影し、並行してSfMの写真撮影。微量炭のサンプリングと、OSL用の土壌サンプリングを行う。埋め戻し完了後、機材を撤収しすべての作業が終了。

第7次調査

- 4月27日 A1 拡張区、A20拡張区掘り起こし。A1 拡張区、A20拡張区の掘削開始。A1 拡張区3層で細石刃が1点、A20拡張区3層から細石刃が1点出土したほか、A1 拡張区、A20拡張区からチップやフレーク等が出土。
- 4月28日 A1 拡張区、A10拡張区の拡張部分を設定し掘削開始。A1 新拡張区の座標を回収し、杭打ち。A1 拡張区、A20拡張区からチップやフレーク等が出土。早田勉氏が火山灰分析用の土壌サンプルを採取。
- 4月29日 雨天のため、現場作業なし。
- 4月30日 A1 拡張区、A10拡張区、A20拡張区を掘削作業。A1 拡張区2層から石刃が1点出土、A10拡張区表土から細石刃が1点、A1 拡張区3層からマンガン1点が出土したほか、A1 拡張区、A20拡張区からチップやフレーク等が出土。
- 5月1日 A1 拡張区、A10拡張区、A20拡張区の掘削作業。A1 拡張区3層から細石刃が1点出土したほか、A1 拡張区、A10拡張区、A20拡張区からチップやフレーク等が出土。
- 5月2日 A1 拡張区、A10拡張区、A20拡張区の掘削作業。A1 拡張区2層から峠下型細石刃核1点、細石刃1点が出土。A10拡張区2層から細石刃が1点出土。A20拡張区3層から片面加工石器1点、有茎尖頭器の基部1点が出土したほか、各調査区からチップやフレーク等が出土。
- 5月3日 A1 拡張区、A10拡張区、A20拡張区の掘削作業。A1 拡張区2層から細石刃が出土したほか、A1 拡張区、A20拡張区からチップやフレーク等が出土。
- 5月4日 雨天のため午後から現場作業開始。雨水除去作業後、A1 拡張区、A10拡張区、A20拡張区の掘削作業。A1 拡張区ZX3の2層の下に旧トレンチと思われる攪乱土を2ヶ所確認。写真撮影。A1 拡張区、A20拡張区からチップやフレーク等が出土。
- 5月5日 各調査区清掃作業後、写真撮影。埋め戻し完了後、機材を撤収しすべての作業が終了。

2. 調査の成果

(1) 層位

A1グリッド、A21グリッドにおける層位の観察から、以下の基本層序を設定している(図2)。

- 1層：表土。黒褐色土層。粘性が弱く、しまりは弱い。クマザサによる浸食が見られる。
- 2層：暗褐色から灰褐色土層。粘性がやや弱く、しまりは弱い。1mm～6mm程度のローム粒が見られる。3a層との境界は不整合。耕作土と考えられる。遺物が出土している。
- 3a-1層：褐色のローム層。粘性がやや強く、しまりは中程度。赤、白、黒のスコリアを少量含む。いわゆるボール状ローム。上部から下部にかけて遺物が出土している。
- 3a-2層：褐色のローム層。粘性は粘性がやや強く、しまりは中程度。いわゆるボール状ロー

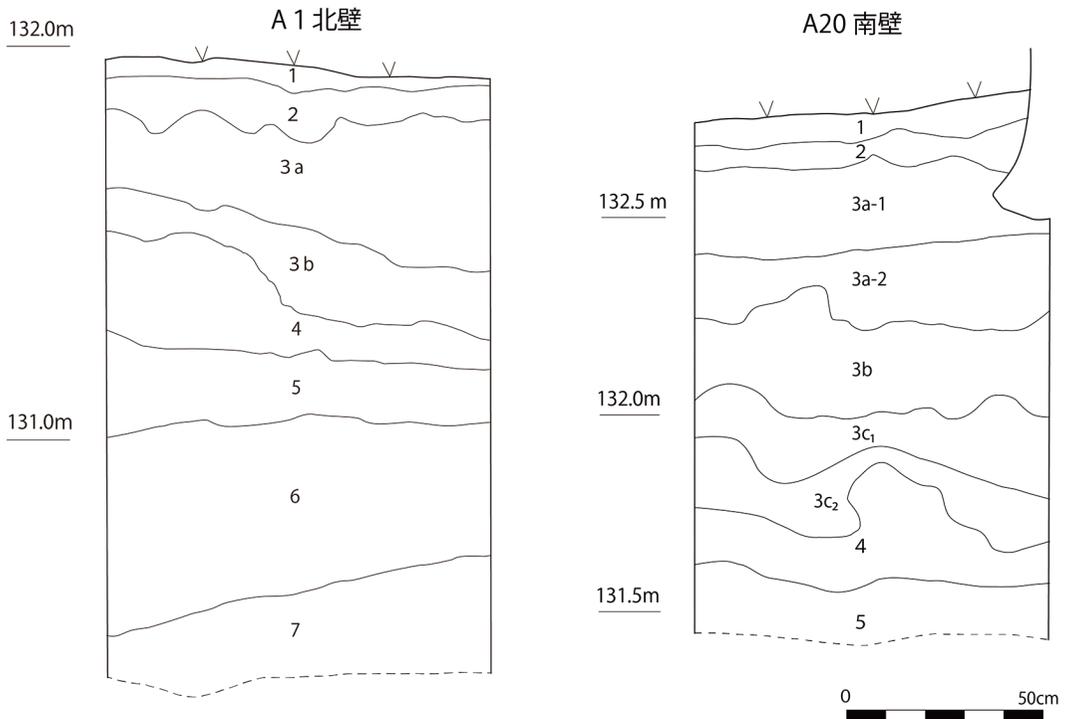


図2. 発掘区のセクション

ム。上部から下部にかけて遺物が出土している。この層の下部が石器出土の帰属層準と考えられる。

3b層：黄橙色のローム層。粘性がやや強く、しまりは強い。黒褐色の粒子を含む。4層由来の火山灰の粒子を含む。

3c-1層：明褐色のローム層。粘性がやや弱く、しまりはやや弱い。4層由来の火山灰を多量に含む。

3c-2層：黄褐色のローム層。粘性がやや弱く、しまりはやや弱い。4層由来の火山灰を多量に含む。4層との層境が大きく波をうつ。

4層：黄色の火山灰層。粘性が弱く、しまりはやや強い。

5層：褐色のローム層。粘性が強く、しまりはやや強い。黒色のスコリアを含む。

6層：橙色のローム層。粘性が強く、しまりは弱い。安山岩の角礫を含む。5層のロームに7層の砂礫が混じったもの。

7層：にぶい褐色の砂層。粘性がやや強く、しまりは弱い。安山岩の角礫を含む。ラミナ状の堆積構造が見られる。

表 1. 第 6 次調査出土遺物表

	有茎尖頭器	石刃	細石刃	細石刃核	彫器	スクレイパー	片面加工石器	二次加工を有する剥片	微細剥離を有する剥片	剥片	チップ	礫	計
A1 拡張区	0	1	5	0	0	0	0	0	0	11	36	6	59
A20 拡張区	2	4	2	0	1	0	0	1	1	238	517	5	771
合計	2	5	7	0	1	0	0	1	1	249	553	11	830

表 2. 第 7 次調査出土遺物表

	有茎尖頭器	石刃	細石刃	細石刃核	彫器	スクレイパー	片面加工石器	二次加工を有する剥片	微細剥離を有する剥片	剥片	チップ	礫	計
A1 拡張区	0	2	6	1	0	0	0	0	0	16	21	2	48
A10 拡張区	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	3
A20 拡張区	1	0	3	0	0	1	1	0	0	141	348	0	495
合計	1	2	10	1	0	1	1	0	0	158	370	2	546

(2) 遺物出土状況と出土遺物

第 6 次調査では、A1 拡張区、A20 拡張区から 830 点の石器が出土した（表 1）。第 7 次調査では、A1 拡張区、A10 拡張区、A20 拡張区から 546 点の石器が出土した（表 2）。

A1 拡張区では、主に第 5 次調査で拡張を行った南東方向に伸びる 1 × 4 m の調査区と、第 7 次調査で設定した拡張区の一部の掘削を行い、いずれの掘削地点からも 2 ～ 3 a 層を中心に遺物が出土した（図 3）。

A10 拡張区では、新規拡張した調査区の掘削を行い、2 層から石器が数点出土している（図 4）。

A20 拡張区では、既存の調査区に加えて新規拡張区の掘削を行い、2 ～ 3 a 層を中心に遺物が多量に出土した。第 7 次調査終了時点で、一部の地点において 3 a 層最下部以降遺物が検出されなくなった（図 4）。

各調査区において既存の調査区から拡張・掘削を行ったが、A1・20 拡張区においては石器集中部が広がることを確認したのみであった。A10 拡張区では、少量の石器が出土しているが、出土は 2 層にとどまる。

以下、第 6・7 次調査で出土した石器から 33 点を図示する（図 5～12）。

図 5-1 は、有茎尖頭器の基部である。C18 グリッド 3 層より出土。石材は黒曜石である。両側縁に擦痕を有し、稜線が磨滅している。折損面には、剥離方向に対向する剥離面と直行する剥離面が数枚観察される。

図 5-2 は、有茎尖頭器の基部である。A19 グリッド 3 層より出土。石材は黒曜石である。両側縁に擦痕を有し、稜線が磨滅している。裏面には折損の際の副次剥離が生じている。折損面の右側縁側には小剥離が観察される。また、折損面はせり上がっており、その先端には小剥離が連続して生じている。

図 5-3 は彫器である。A18 グリッド 3 層より出土。石材は硬質頁岩である。右側縁には周縁に施された二次加工と 2 枚の彫刀面、左側縁には 1 枚の彫刀面を有する。また、右側縁上端には、左側縁の彫刀面を作出するための打面成形を目的とした平坦加工が見られる。下端部からの加撃

A1 拡張区

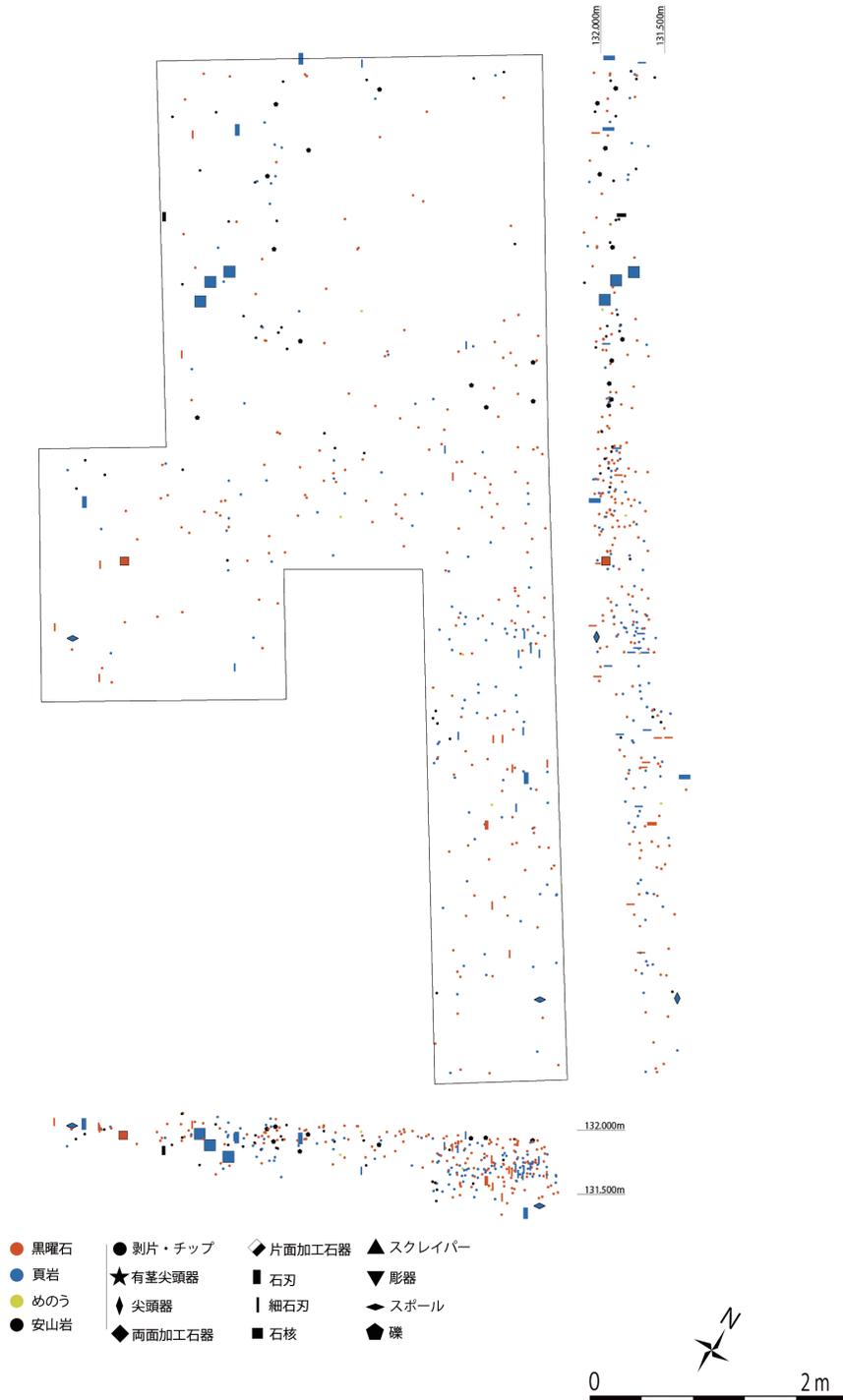
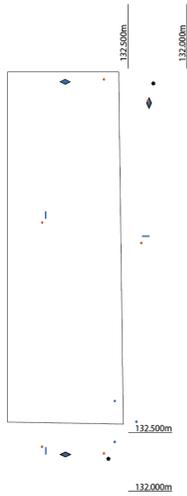


図3. 出土石器分布図(1)

A10 拡張区



A20 拡張区

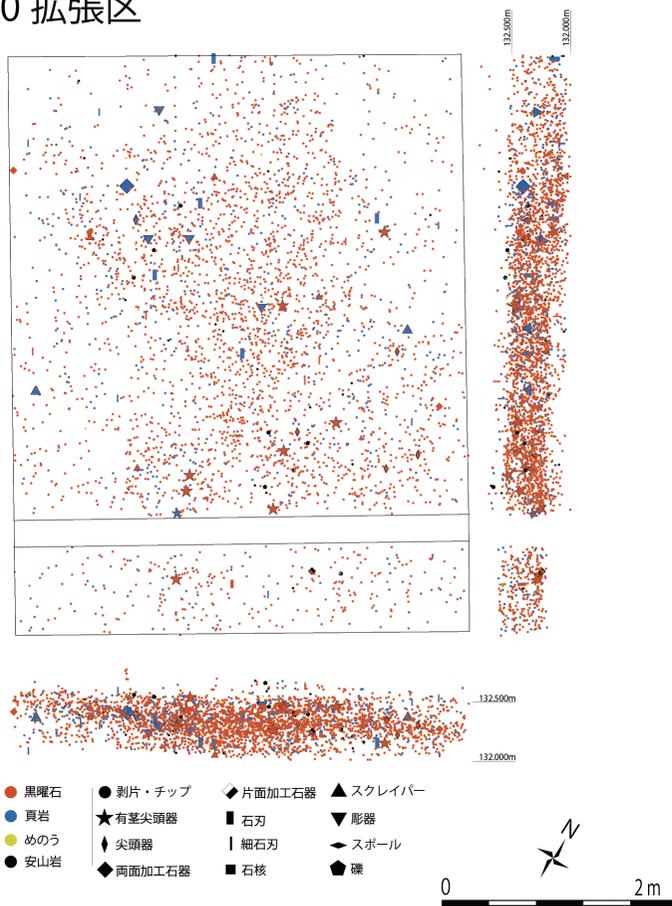


図 4. 出土石器分布図 (2)

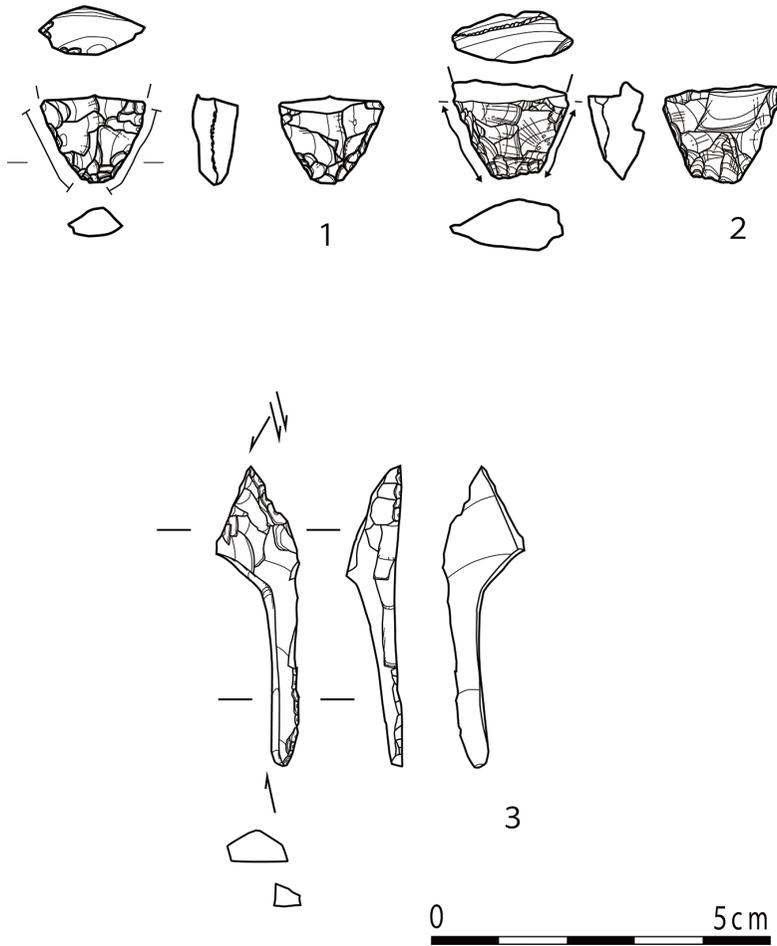
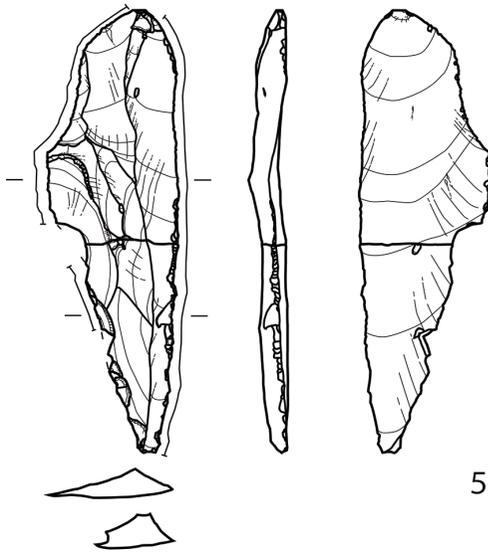
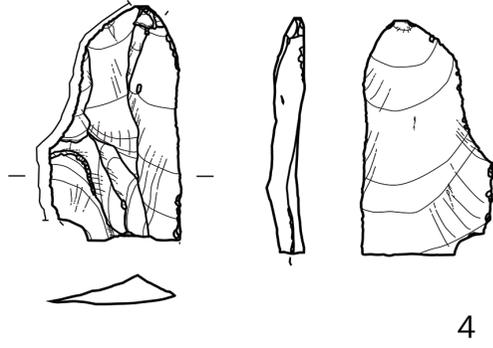


图5. 出土石器实测图(1)



0 10cm

S=1/2

图6. 出土石器实测图(2)

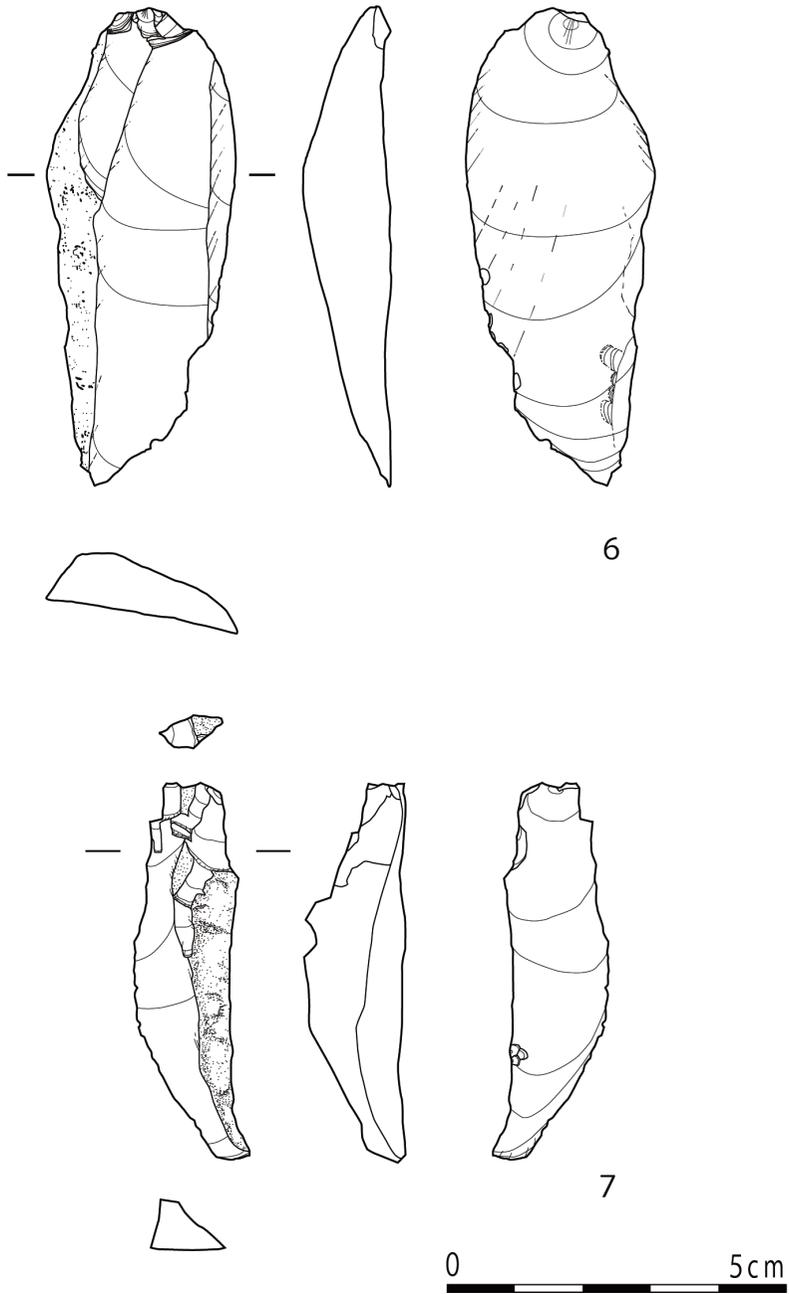


図7. 出土石器実測図(3)

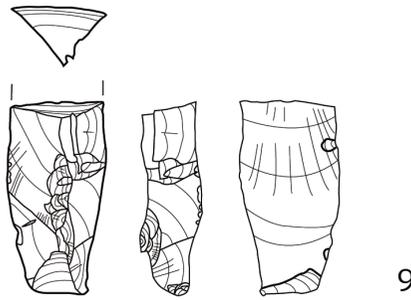
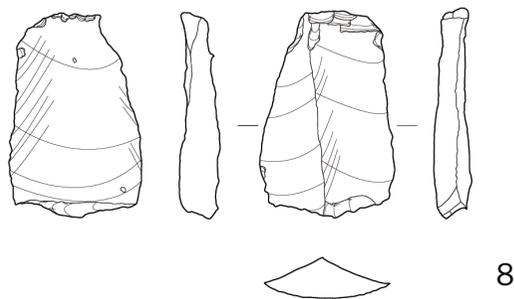


图 8. 出土石器实测图 (4)

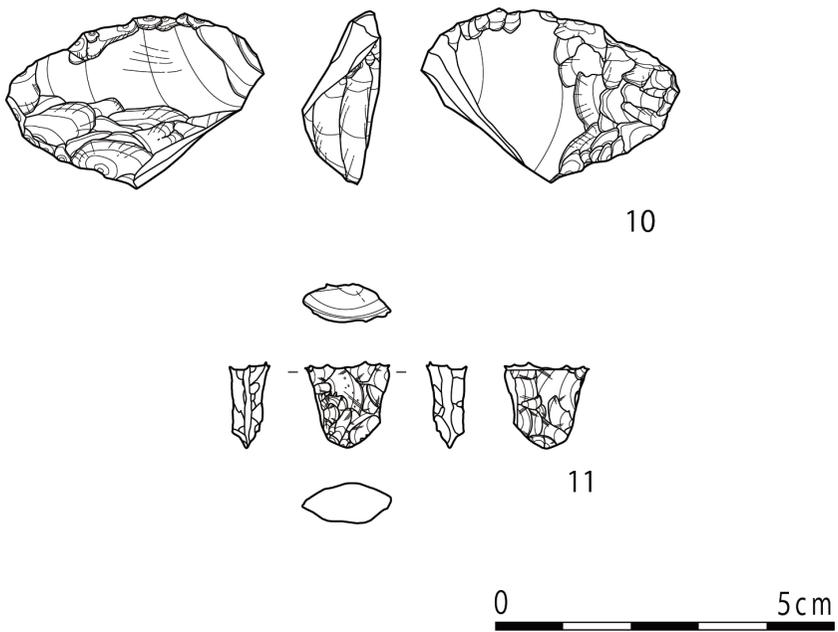
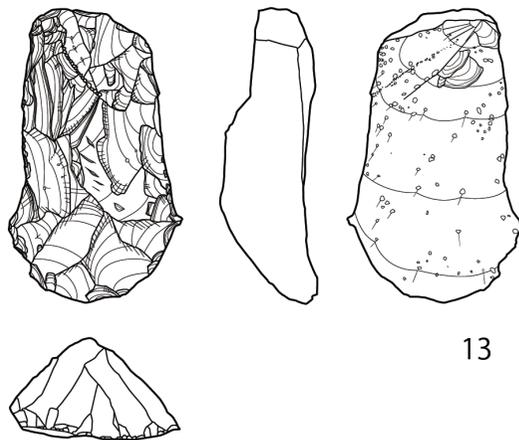
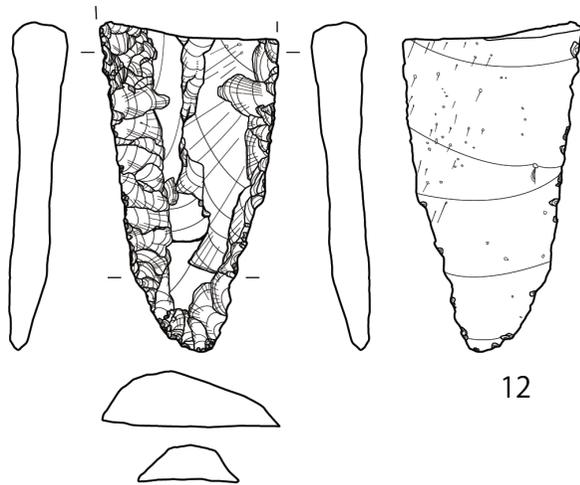


図9. 出土石器実測図(5)



0 5cm

图10. 出土石器实测图 (6)

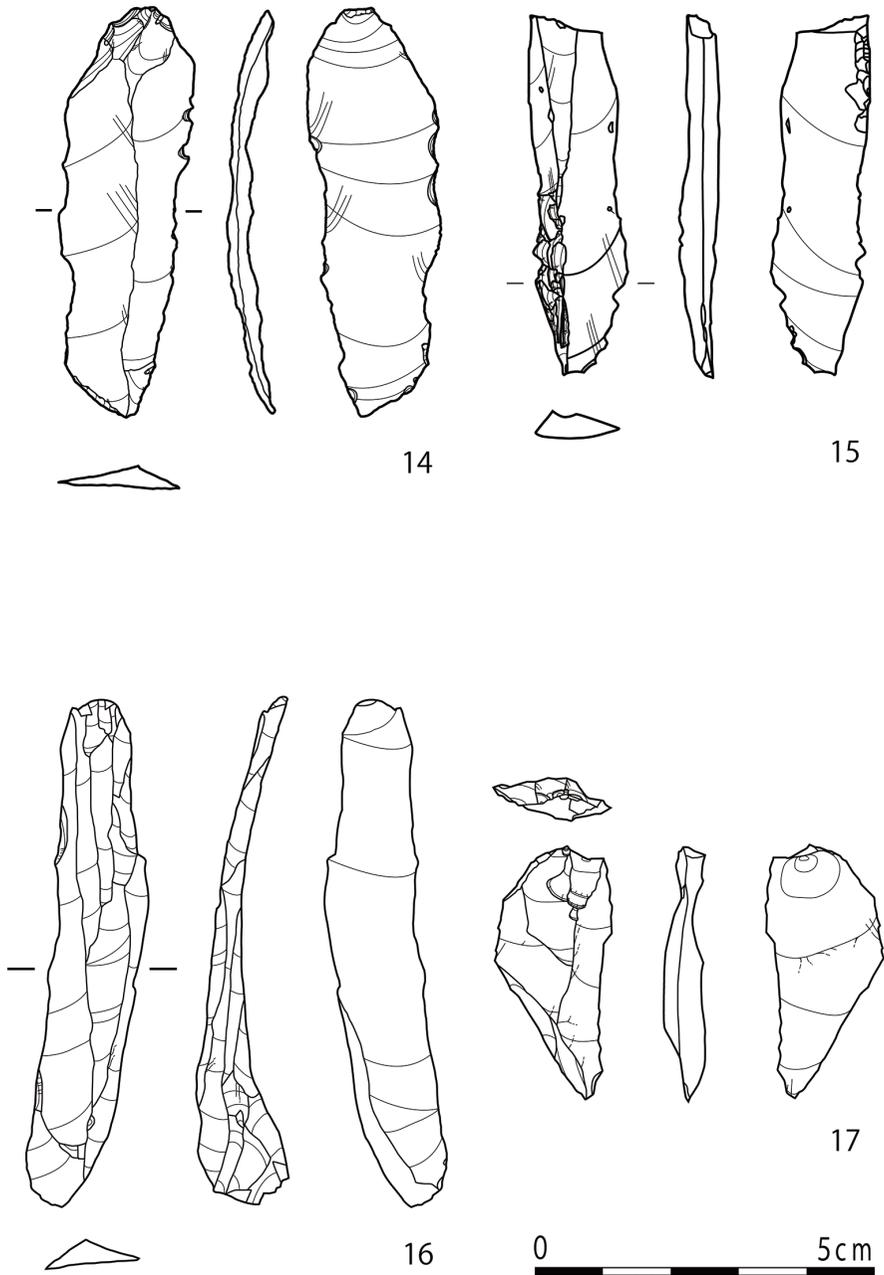


図11. 出土石器実測図 (7)

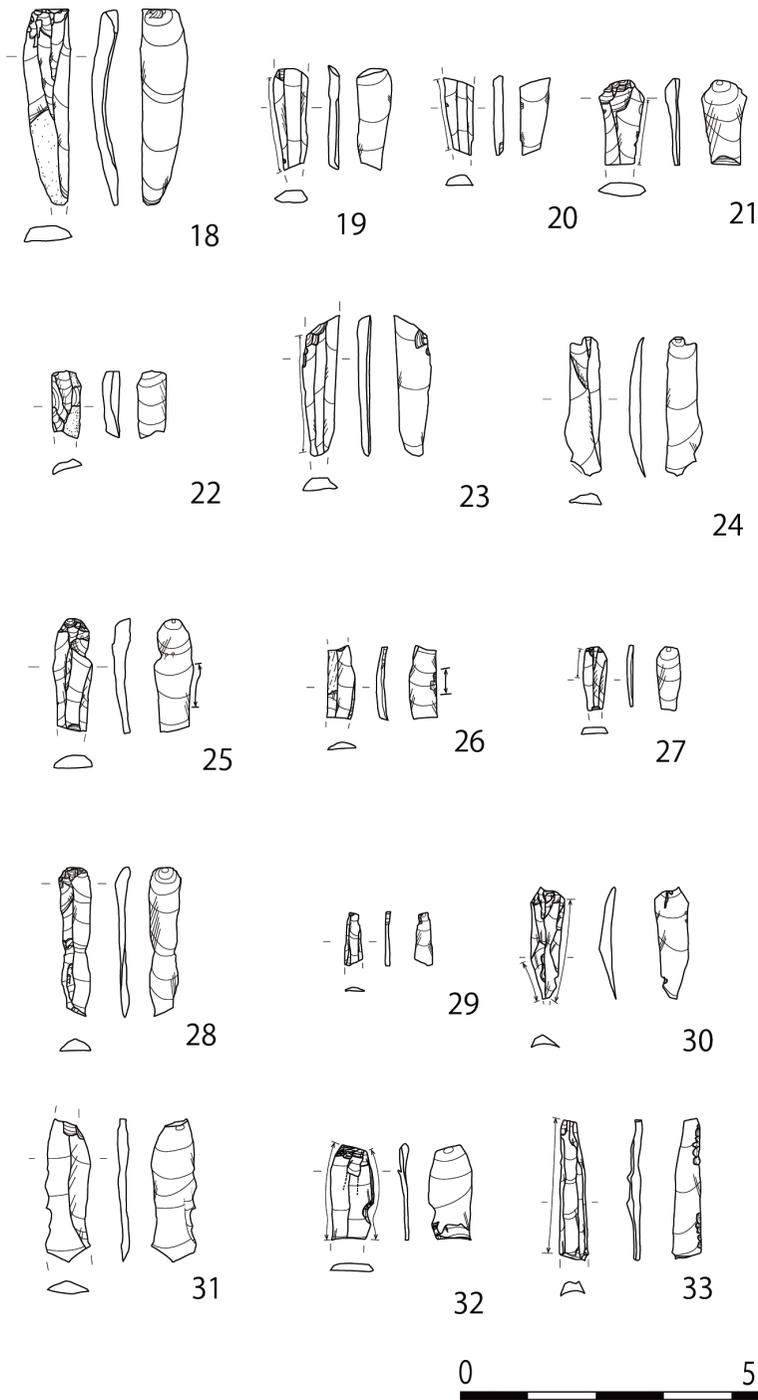


图12. 出土石器实测图 (8)

により彫刀面を作出しようとしたが、その際に器体の3分の1ほどを取り込んでしまったことが看取される。

図6-4は、石刃である。C21グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。両側縁に微細剥離が生じている。表面打面付近には擦痕が観察される。第4次調査で出土した資料と接合する(図6-5)。両側縁ともに微細剥離が生じているが、特に右側縁下部に集中している。

図7-6は、石刃である。D20グリッド3層より出土。石材は硬質頁岩である。表面上端部に頭部調整が施される。表面左側に原礫面を残す。右側縁裏面にガジリ痕が見られる。

図7-7は、石刃である。C18グリッド3層より出土。石材は硬質頁岩である。打面付近には頭部調整が施される。表面右側と打面の一部に原礫面を残す。

図8-8は、石刃である。ZT1グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。上下端部が折損している。

図8-9は、石刃である。ZZ20グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。中央の稜線上には稜調整を目的とした剥離が加えられる。石刃剥離の初期段階の稜付き石刃だと考えられる。上下端は折損しており、下端の折損面は表面に及ぶ。裏面の下端部に主要剥離面と直行する方向の剥離が生じている。両側縁には微細剥離が生じている。

図9-10は、細石刃核である。ZX3グリッド2層より出土。石材は黒曜石である。石核背部の両面に平坦加工を施して断面をD字状に整形している。また、石核上端部からは、比較的細かな剥離が加えられている。細石刃剥離の打面は石核上端部に設定され、素材剥片の表面に及ぶ。細石刃剥離は素材剥片の裏面に及び、4枚の細石刃剥離が行われたことが観察される。

図9-11は、有茎尖頭器の基部である。ZZ20グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。両側縁に擦痕を有し、稜線が摩滅している。特に左側縁の擦痕は裏面に及ぶ。下端部にも軽度の擦痕を有する。

図10-12は、片面加工石器である。ZZ19グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。上端部は折損している。平坦加工が全周に回る。左右の側縁で二次加工角度の様相が異なり、左側縁からの剥離は比較的平坦で中央にまで伸びている一方、右側縁からの剥離は急角度でステップが見られ、剥離の伸びは低調である。表面の中央には素材面が残置されており、稜線の一部が摩滅している。また、裏面には小剥離が生じている。

図10-13は、エンドスクレイパーである。C20グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。球果を非常に多く含む。下端部に平坦剥離を加えて刃部としている。両側縁にはより急角度の加工が施されている。打面は残置されている。

図11-14は、石刃である。C20グリッド3層より出土。石材は硬質頁岩である。表面上端部には微細な頭部調整が施される。

図11-15は、石刃である。ZX3グリッド2層より出土。石材は硬質頁岩である。一部中央の稜

線上から稜調整を目的とした剥離が加えられる。表裏面ともにガジリ痕が観察される。上端部はガジリによって折損している。耕作土層からの出土で、表面の稜線上の一部に酸化鉄が付着していることから、農耕具との接触によって折損したと考えられる。

図11-16は、石刃である。ZV 1 グリッド 3 層より出土。石材は硬質頁岩である。ウートラパッセ状の剥離により底面を取り込んでいる。底面には、主要剥離面と直行する向きの剥離を有する。下端部のステップ状の剥離はガジリ痕である。

図11-17は、剥片である。D20グリッド 3 層より出土。石材は硬質頁岩である。剥片の打面に残る先行する剥離から、打面再生剥片、または打面值調整剥片であることが看守される。

図12-18は、細石刃である。ZW 1 グリッド 3 層より出土。石材は硬質頁岩である。下端部が折損している。打面は残置されており、打面調整が加えられている。表面上端部には頭部調整が施される。表面の一部には原礫面が残る。

図12-19は、細石刃である。ZW 1 グリッド 3 層より出土。石材は頁岩である。上下端部が折損している。右側縁の一部と左側縁に微細剥離が生じている。裏面には斜め方向の小剥離が観察される。

図12-20は、細石刃である。ZW 1 グリッド 3 層より出土。石材は頁岩である。上下端部が折損している。左側縁に微細剥離が生じている。右側縁の一部にガジリ痕が見られる。

図12-21は、細石刃である。ZV 1 グリッド 3 層より出土。石材は黒曜石である。下半部が折損している。表面上端部には頭部調整が加えられている。右側縁には微細剥離が生じている。

図12-22は、細石刃である。ZV 1 グリッド 3 層より出土。石材は黒曜石である。上下端部が折損している。表面の右側には原礫面を残す。

図12-23は、細石刃である。ZV 1 グリッド 3 層より出土。石材は頁岩である。上下端部が折損している。表面上端部には折損の際の副次剥離が生じている。左側縁に微細剥離が生じている。また、上部には表裏面ともに小剥離が生じており、切り合い関係から、折損の際の副次剥離よりも新しいことが見受けられる。

図12-24は、細石刃である。ZZ19グリッド 3 層より出土。石材は頁岩である。下端部の一部が折損している。

図12-25は、細石刃である。D19グリッド 3 層より出土。石材は黒曜石である。下端部が折損している。表面上端部には頭部調整が施される。また、ステップ状の先行する剥離の影響で右側縁の一部がくの字状を呈している。

図12-26は、細石刃である。B20グリッド 3 層より出土。石材は黒曜石である。上下端部が折損している。左側縁の一部に微細剥離が生じている。裏面には斜め方向の小剥離が生じている。また、右側縁の上端部からは彫器状剥離が生じている。

図12-27は、細石刃である。ZV 0 グリッド 3 層より出土。石材は黒曜石である。下端部が折損

している。左側縁の一部に微細剥離が生じている。上端部にはわずかに頭部調整が施される。

図12-28は、細石刃である。ZV 0 グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。下端部が折損している。上端部に頭部調整が施される。

図12-29は、細石刃である。B20グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。下端部が折損している。裏面には小剥離が生じている。

図12-30は、細石刃である。ZX 3 グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。下端部が欠損している。上端部には頭部調整が施される。

図12-31は、細石刃である。ZZ10グリッド2層より出土。石材は硬質頁岩である。上下端部が欠損している。表面上端部には折損の際の副次剥離が生じている。

図12-32は、細石刃である。ZW 3 グリッド2層より出土。石材は硬質頁岩である。下端部は折損している。裏面下端部には折損の際の副次剥離が生じている。右側縁にはガジリ痕が観察される。

図12-33は、細石刃である。D21グリッド3層より出土。石材は硬質頁岩である。下端部は折損している。左側縁には微細剥離が生じている。また、一部にはより大きな剥離が連続して生じている。

3. 今後の課題

(1) A20拡張区の分布と石器群について

第1次調査から掘削を継続しているA20拡張区においては、平面的な発掘区の拡張を続けながら、ある程度の垂直的な分布を把握することができた。現時点では台地の傾斜を考慮していないが、確認した範囲において、遺物は概ね第2層から第3a層にかけて集中している。第4層に由来する黄色火山灰が混在し始める第3b層においては、遺物の出土はほとんど出土しない。

過去に函館市博物館が実施した調査では、耕作土および上部ローム層から石器が出土しており(吉崎 1960)、上部ローム層は本調査における第3層に相当すると考えられる(長崎ほか 2023)。本調査において、第3a層から石器が集中して出土している結果と整合的であるといえる。

本拡張区からは、多量の剥片・破片が出土している。また、有茎尖頭器や両面加工石器、さらには尖頭器製作に伴う剥片も確認されていることから、有茎尖頭器の製作址である可能性が高いと考えられる。加えて、第7次調査では、頁岩製の蘭越型細石刃核に由来する打面再生剥片が出土している。当該剥片を除いて、現時点では、蘭越型細石刃石器群に明確に帰属しうる石器は確認されておらず、その混在はごく限定的であると考えている。なお、石器群の平面的な重複は明らかではあるが、垂直的に分化可能であるか否かについては、引き続き検討の余地が残る。石器群の垂直的・層位的分化の解明は、立川1遺跡の発掘調査における当初からの目的の一つであり、今後は石器製作技術、石材、出土レベルや傾斜などの関係を踏まえ、垂直的な出土傾向について

精査していく。

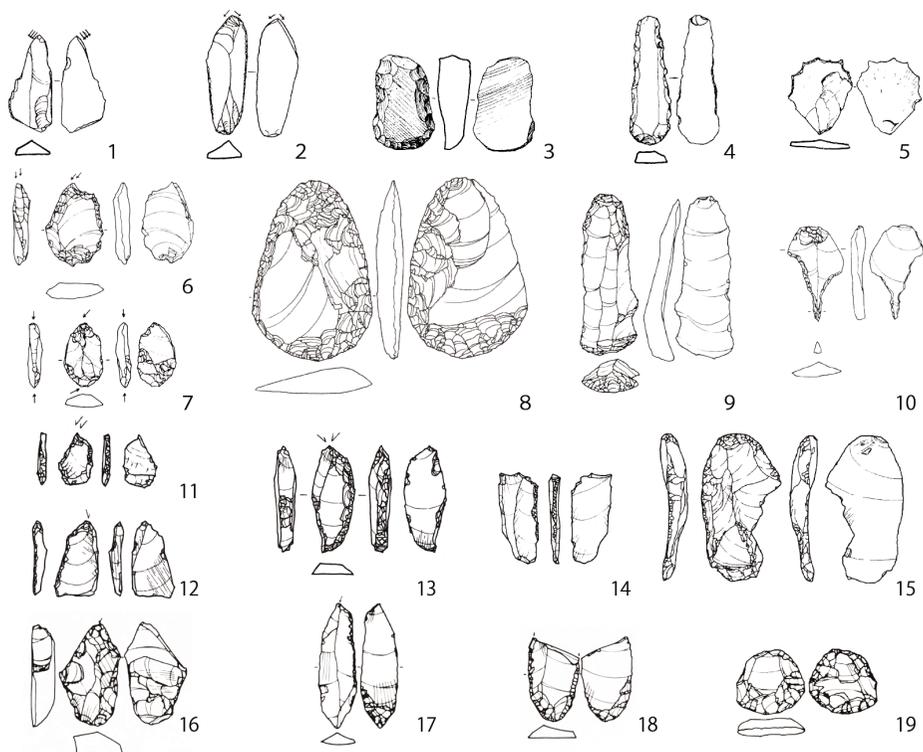
(2) 峠下型細石刃核について

第7次調査において、A1 拡張区の第2層より峠下型細石刃核が1点出土した。当該石器の形態的特徴については、第2章で先述した通りである。高さ2.6cm、長さ3.8cm、厚さ1.2cmの黒曜石製で、素材には石刃もしくは縦長剥片が用いられる。表面には素材面が残置され、縁辺には比較的急傾斜の剥離が加えられ、全体的な形状が整えられ、断面はD字状に仕上げられている。素材腹面の底縁部には、対向するように平面的な剥離が施されている。細石刃剥離打面は素材背面（表面）のねじれに沿って設定され、表面に及んでいる。作業面において看取される細石刃剥離面は4面であるが、打面の様相や全体形状から、細石刃剥離がある程度の期間進行していたと考えられる。寸法比は、長さ／高さが1.5、高さ／厚さが2.2であり、これらの特徴を総合すると、当該石核はいわゆる峠下型細石刃核2類に分類されると考えられる（山田 2006、寺崎 2006など）。ただし、本調査において峠下型とみられる細石刃核はこの1点のみであり、峠下型細石刃核1類に属する可能性も完全には否定できない。この細石刃核が出土したA1 拡張区の近隣に位置すると推定される函館市博物館発掘の第I地点では、蘭越型細石刃石器群の存在が確認されている。峠下型細石刃核1類は、En-a 火山灰降下以前の蘭越型細石刃石器群に時期的に近い段階に位置付けられ（山田前掲、寺崎前掲など）、当該石核が峠下型1類に属する可能性もあわせて指摘しておきたい。

峠下型細石刃核2類の石器組成や層位・編年上の位置づけについては、先述の論考（山田前掲、寺崎前掲）によく整理・考察が行われている。En-a 火山灰を含む層の上位から細石刃核の出土が確認されており（北海道文化財保護協会 1997）、晩遺跡では札滑型細石刃核との共伴例も報告されている（帯広市教育委員会 1985・1986）。

現時点で立川1遺跡においては、大型の石刃を主とする石器群（第IV地点）、蘭越型細石刃石器群（第I地点、A1 拡張区）、忍路子型細石刃石器群（第I・第II地点）、有茎尖頭器石器群（第II・第III地点、A20・A30拡張区）が報告されている（吉崎 1960、長崎ほか 2023・2024・2025）。しかし、細石刃核やスポールの明確な出土例がなかったことから、これまで峠下型・札滑型細石刃石器群は認識されていなかった。本調査により、出土数は少ないものの、立川1遺跡においても峠下型細石刃石器群が存在することが判明した。多様な石器群が認められる同遺跡においては、今後、峠下型を含む各石器群の検討を改めて行う必要がある。特に、A20拡張区における有茎尖頭器石器群と蘭越型細石刃石器群のように、複数の石器群が平面的に重複して出土している可能性にも留意すべきであろう。

最後に、今後の石器群分類に資するために、峠下型細石刃核2類に伴う主要な石器組成について確認しておきたい。峠下型2類の出土遺跡としては、先述の遺跡に加えて、知内町湯の里4遺



1～5：立川1遺跡第I地点（吉崎1960） 6～10：湯の里4遺跡B群（北海道埋蔵文化財センター1985）
 11～15：オサツ16遺跡A地区（北海道文化財保護協会1997）
 16～19：暁遺跡スポット1（帯広市教育委員会1985）

0 5cm

図13. 各遺跡主要石器

跡が挙げられる。これらの遺跡では、細石刃のほかに石刃・彫器・搔器・石錐などが出土している。彫器は、剥片の縁辺を加工し斜刃、とりわけ左斜刃となるように彫刀面を施したものが多く、細長い石刃を素材とするようなものは少ないようである。搔器は、石刃を素材とし末端を円弧上に丁寧に整形するものは少なく、剥片が素材となるものが多い。また、刃部には裏面からの剥離が施されたものもあり、一部が両面加工になっている搔器も見られる（図13）。立川1遺跡第I地点においては、上記の特徴に該当する石器は少なく、峠下型2類との直接的な関連性は明確でない。また、上述の形態は他の石器群にも共通するものが含まれており、同一発掘区内での石器群の分化に関しては、今後の調査成果を踏まえ、慎重に分類・検討を進める必要がある。

おわりに

以上、立川1遺跡第6次調査と第7次調査の概要について述べた。

A1拡張区では、調査区の拡張を行い、遺物が出土している。新たに峠下型細石刃核が出土し、その編年的位置づけや他の出土石器との同伴関係等に関して課題が残された。前述の通り、遺物

集中部の分布や石器組成の検討が必要である。

A10拡張区では、少量であるが石器が出土した。市立函館博物館調査の第Ⅱ地点が付近にあると予想され、今後の調査では、旧調査区の検出が期待される。

A20拡張区では、これまでの調査と同様に石器集中部の掘削を行った。分布範囲の確認を目的として調査区の拡張を行ったが、依然として平面分布の様相はつかめていない。一方で、調査区内の一部で掘削を進める中で、3a層最下部付近で遺物が検出されなくなった。石器集中部の垂直分布の下限が3a層最下部付近である可能性を示唆している。

第6・7次調査においても、多くの石器が検出され、遺物分布の傾向から石器集中部の様相が徐々に明らかになっている。今後も調査を継続するとともに、出土遺物の整理作業・検討を行い、遺跡全体の評価を行っていききたい。

最後に、発掘を許可していただいた地主の会澤 守さま、蘭越町教育委員会に感謝申し上げます。なお、図版の一部は石原七奈子、岩丸晶太、杉山美玲奈、高倉大地、横山侑汰（早稲田大学文学部学部生）の諸氏に作成を補助いただいた。

引用・参考文献一覧

帯広市教育委員会 1985 『帯広・暁遺跡』。

帯広市教育委員会 1986 『帯広・暁遺跡2』。

寺崎康史 2006 「北海道の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』同成社。

長崎潤一・高倉 純・北村成世・田畑幸嗣・谷川 遼 2023 「北海道蘭越町立川1遺跡第1次調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第68輯、早稲田大学大学院文学研究科。

長崎潤一・高倉 純・北村成世・阿部嵩士・高林奎史 2024 「北海道蘭越町立川1遺跡第2次・3次調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第69輯。

長崎潤一・高倉 純・北村成世・阿部嵩士 2025 「北海道蘭越町立川1遺跡第4次・5次調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第70輯。

北海道文化財保護協会 1997 『オサツ16遺跡(2)』。

北海道埋蔵文化財センター 1985 『湯の里遺跡群』。

山田哲 2006 『北海道における細石刃石器群の研究』六一書房。

吉崎昌一 1960 「立川遺跡の出土状態と遺物」『結語』『立川—北海道磯谷郡蘭越町立川遺跡における無土器文化の発掘調査—』市立函館博物館紀要 No.6。